リヨン風信（三十）『自由への扉』

中川莉羅

六月にしては暑い日々が続いている。太陽の照りつける通りをゆく人々はもはやマスクをしていない。十六日のカステックス首相の記者会見により、十七日から屋外でのマスクの着用義務が解除されると発表があったのだ(ただし、屋内でのマスク着用は相変わらず義務付けられている)。自転車で楽しそうに行き交う若者たちや、オープンテラスでくつろぐ人々も、心なしかいつもよりリラックスして見える。

五月某日、友人の従兄弟と、彼らの会社の元同僚たちがタラールのアパートに遊びに来てくれた。ここでは仮に、友人をアラン、彼の従兄弟をグザビエ、彼らの元同僚たちをトマ、マリーとそれぞれ名づけることにする。アランとグザビエはある時期同じ会社で働いていた。彼らからは会社の様子について度々話を伺うことがあったのだが、その中でも「とびきり感じのいい同僚がいる」と聞かされていたのが、今回遊びに来てくれた方々である。彼らとは、私も一度だけお目にかかったことがある。トマとマリーはとても感じのいいカップルで、オープンな心と明晰な頭脳を持つ人々だという印象を受けた。そして日本人である私にも、とても親切に対応してくれたのをよく覚えている。

フランス人は、気軽に友人を家に呼ぶ習慣がある。引っ越しをしたから、あるいはバカンスが始まったからと言っては(つまり何かと口実を見つけては)ホームパーティーを開く。典型的なパターンとしては、週末の午後に誰かの家に集まり、まずは「アペロ」からスタートする。これは「食前酒」を意味するapéritif(アペリティフ)の略称で、転じて軽食や食前酒をつまむ夕方の時間帯をも意味するようだ。そこで用意されるのは、大概ポテトチップスやナッツなどの乾きもの、あるいは生野菜のスティックやチーズ、パンなどである。おしゃべり好きなフランス人は、グラス片手に二、三時間は優に超えて話す。例えばその日の話題は、職場の現状やお互いの近況報告から始まり、続いて映画、フランスでの移民問題、コロナウィルス政策への批判、はたまた秘密結社の存在など、あらゆることに及んだ。正直に言うと、ネイティブ同士の口角泡を飛ばす議論についていくのは苦手である。ありとあらゆる方向に話題が向かい、しかもみな、猛スピードで話す。

そして二、三時間ほど経ったところで「さあ、それじゃあ、ピザでも取ろうか」ということになる。フランス人の夕飯は遅い。しかもこの時期の日の入りは夜の九時半ころな

ので、まだまだ昼間の気分が抜けないという理由もあるのかもしれない。

ところでグザビエと私はベジタリアンである。ベジタリアンといっても色々と種類があるようで、彼の場合は肉類や卵等が体質に合わず、特定の食べ物しか受け付けないというタイプのベジタリアンである。私はラクト・オポベジタリアンと呼ばれるタイプで、卵と乳製品は摂取するが、肉類、魚介類はいただかないことにしている。みんなが同じものを注文しているのに、「いや、私はいりません」と言うのは、日本ではとても気が引けたものだ。ところがここでは、「あ、そう？」と言う感じでいい具合にみんな放っておいてくれるので、気が楽である。グザビエは持参したエビやクラッカー等を、貴族のような優雅さで食している。そして、自分だけ勝手に違うものを食べていいのやらびくびくしていた私に、そっとにんじんのスティックを差し出してくれた。とても素敵な笑顔とともに。自由に振る舞っているようでありながら、その場にいる人々の調和を乱すわけでもない。「我儘三昧」とは全く異なる、真の意味での個人主義とはこういうことかと、妙に感動したものだった。やがて夜も更け、その日はお開きとなり、私たちはそれぞれ静かに眠りに落ちていった。

その晩、にんじんスティックは、「自由とは何か」という問いを私に投げかけた。たかだかにんじんで、何を大げさなと思われるかもしれないが、一応思考実験を試みる。　昔、あるひとに言われたことがある。曰く、「君が東京タワーから飛び降りても、本当にそうしたいと切に願うなら、そうすればいい。それは君の自由だから。あるいは、誰かを完膚なきまでに傷つけたいと思い、それを行動に移したとしても、君に正当な理由があるなら、僕は君を許すだろう。何故なら、それもまた君の自由だから。だけど、君は自分の選択した行動の責任を取らなければいけない。人間の社会には、法律ってものが存在するからね。でも、君の精神は本当は法律には縛られていない。すべては可能なのだ。君がその責任をすべて負うという覚悟があるのなら」と。自由とは、白紙に色とりどりのクレヨンで夢を描くような無邪気な楽しさばかりではない。身を切るような厳しい風にたった一人で立ち向かわなければいけないこともあるだろう。そして自由を勝ち得たいと思う人間は、時には理解されることを諦めなければならない。羊の群れから抜け出すことが自由であるなら、その先に待ち受ける孤独はその代償だからだ。さて、私の精神

はどこまで自由になれるだろうか。さらなる思考実験をする間もなく、眠りに落ちた。

翌日は気持ちのいい五月晴れであった。アランの妹さんご家族の家に前日のメンバーでお邪魔することとなった。タラールからさらに車で二十分ほどゆくと、目の前に広大な牧草地が広がっている。妹さんご夫婦はその敷地で農業を営んでいるのである。いつもと変わらない、穏やかな笑顔でご夫婦が出迎えてくれた。その後ろから、少し恥ずかしそうに四人の子ども達が歓迎してくれる。十六歳の長女、十三歳の次女、九歳の三男、そして六歳の末っ子の男の子である。天気が良かったので、庭でアペロの続きが繰り広げられる。大人たちはまたしても政治問題やら夏の旅行の計画やらについて話すのだが、その隅っこで、二人の少年は恥ずかしそうにもじもじしている。「コーラ飲む？」と訊いてみるとこっくりと頷いたので、ガラスのコップに注いでやった。ちいさな可愛らしい指で、しっかりとそれぞれのコップを持つ彼らは、すでに心の中に宇宙を持っている。彼らにとっては、テーブルの上を這う小さな羽虫も、ちょこちょこと歩く鶏の一家も、風に吹かれて飛ぶ一枚の葉も、すべてが宝物のようである。やがて大人たちの会話に飽きてきたのか、「今流行しているアニメを教えてあげる！」と言って、彼らは私を家の中へと連れて行った。ありとあらゆるテーマの、様々なスタイルのアニメが、代わる代わるパソコンの画面に現れる。

「ねえ、これがね、僕のお姉ちゃんが描いたイラスト。上手でしょう？」

「あのね、今、僕が一番好きなのはこのアニメ。主人公は魔法を使えるんだよ」

長いまつげと美しい大きな瞳をした少年たちは、代わる代わるに口を開く。私はどちらを見ていいやら分からず、しかし精一杯うん、うん、と頷く。彼らは、この不可思議な日本人を一応仲間と認めてくれたようである。夕方、牧草地を少し見学させてもらい、私たちはすっかり満足しきってその場を後にした。

帰宅すると、友人は私に楽しかったかいと訊いた。うん、最高の一日だったと、私は答えた。自由への扉がふと開かれたような、楽しい夏の午後だった。美しい夏の空に、宇宙への招待状のような綿雲がくっきりと浮かんでいる。これから暑くなりそうだ。

◆リヨン風信（二十九）◆

孔雀

中川莉羅

夕方になると窓の外で声がする。初めはひとの声かと思った。かん高く、規則的に、誰かを呼ぶようなその声は、しかし猫の声のようでもあり、鳥の鳴き声のようでもある。ある日友人がインターネットで調べた結果、それは孔雀の鳴き声であることが判明した。タラール市内を自由に歩き回るこの気高い鳥の王の出生地は不明である。わかっているのは、彼は二年ほど前からどこからともなくこの街に現れたということ。丘の辺りをぶらぶら散歩し、時には明け方に民家の戸を叩くこともあるということ。そして孔雀を定期的に迎え入れている家族が彼につけた名前は「レオン」であるということ。言われてみると、その叫び声は「レオン、レオン」と聞こえなくもない。寂しいのか、空腹なのか、雨を告げているのか。人間にはわからないメッセージを、彼は今日も発し続けている。

日本でもついに再度の緊急事態宣言となり、家族や友人に安否を確かめた。幸い、生活に特に不自由もなく元気に過ごしているという返事があり、一安心した。しかし決して楽観の許される状況ではない。速やかに事態が収束に向かうことを願うばかりである。こちらフランスでは、夜間外出制限は六月末まで継続されるが、五月十九日以降、カフェやレストラン、そして映画館・劇場、ショッピングセンターなども人数制限はあるものの、再開の見込みである。

若葉のささやくこの季節は、私にとっては特別な季節である。五月十九日は祖父であり俳人・中村石秋の命日であった。めぐりあわせというのか、ほぼ時を同じくして五月十一日、祖父の血を継ぐ従兄弟の元に新しい命が訪れた。母が送ってくれた写真を拝見すると、大変可愛らしい女の子であった。残念ながらコロナ渦のため、出産への立会いや病室へのお見舞いは禁止されているそうだが、母子ともに健康だったと、従兄弟から聞いてほっと胸を撫でおろした。思えば、大変申し訳ないことだが、彼の第一子誕生の際にも私はフランスにいて、直接顔を見て「おめでとう」と言っていないのだった。

従兄弟は中国に留学した後、帰国してから商才をめきめきと発揮し、彼の友人の美容師さんとともに東京に店舗を構えている。今では個人事業主であり、二児の父である。あの頃、プロレスや仮面ライダーごっこをして遊んでいた幼い男の子は、当たり前のことだけれど、もういない。今度は彼が父親となり、新しい命の成長を見守ってゆく番なのだろう。

最近、日本にいる母親に無理を言って幼少期の写真を送ってもらった。幼稚園のお遊戯会や小学校の入学式の写真に混じって、山口県に家族で帰省した際の写真が見つかった。写真の中で、祖父は格子模様のシャツにブルーのカーディガンを羽織り、紺色のズボンに草履をひっかけ、穏やかな眼をして微笑んでいる。その隣に、どこか得意げな顔をした小学生の私がいる。あのからからと鳴る引き戸を開けて、線香の香りのするなつかしい仏壇の前を通り、「おじいちゃん、おばあちゃん、ただいま！」と叫べば、今にも優しい祖父母が出迎えてくれそうな気がする。

夏休みに山口県に帰省すると、私たち家族は祖父母と共に駅前のデパートに必ず行った。祖父は、おもちゃだのお人形だの洋服だのを姉や私にふんだんに買い与えてくれた（孫にはとことん甘いひとだったので、何かというとすぐに「買うてやろうか？」というのが口癖だった）。そして喫茶店に寄

り、祖父は生クリームたっぷりのショートケーキをほおばり、夕暮れ時に帰宅する、というのが定番コースだった。愛情をこっぽちも出し惜しみしない、とても豊かな人だったと思う。

祖父はいつも、どんな人にも優しかったけれど、「優しく在ることが出来る」というのは、同時に「強さ」でもあるのだと、大人になってからやっと気づいた。レイモンド・チャンドラーの小説の中の、私立探偵フィリップ・マーロウのセリフを思い出す。

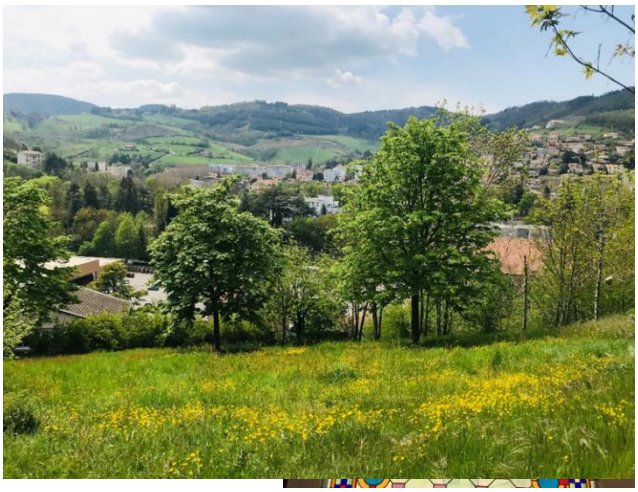
「強くなければ生きていけない。優しくなければ生きる資格もない」

（『プレイバック』レイモンド・チャンドラー　1958年）

私も、強くありたいし、優しくもありたいと願う。上っ面の表面的な優しさではなく、人間としての弱さも、愚かさも、醜さも認めたうえで、真摯になりたい。けれど実際には、それはとても難しいことである。

母は、小学生の私が日本に帰ってきた夢を見たそうだ。夢の中では時空が捻じ曲がり、過去と現在が混じりあう。はじまりと終わりは円周の上で繰り返される無限の輪舞となり、幸せな時間は永遠に繰り返される。現実の世界では、思い出の残り香をまさぐるように毛布に頭を突っ込んでみても、何も変わりはしない。ただ古い写真を眺めて、逢えない人を偲ぶ。

家の外に出てみれば、くっきりと非現実までに青い空に、綿菓子のような雲が浮かんでいる。通りをゆく人々は、よく響く陽気な声で挨拶を交わしている。夢から覚めたように辺りを見回し、おぼつかない足取りで教会に行き、祈る。突然の雨に打たれ、息せき切って帰宅することも、温かいココアを飲むことも、日本にいる友人とメールのやりとりをすることも、実は信じられないくらいの小さな、ちいさな奇跡の連続なのかもしれない。明日には金融システムが崩壊し、市民戦争がこの国で起こったとしても、とりあえず今のところ、私たちはまだ生きている。



大人になってしまった私たちは忘れてしまうけれど、誰もがみんな天使のような、小さな手と愛らしい目をした子どもたちだったのだ。そのよちよち歩きの子どもたちが大人になり、また次の世代を創ってゆく。ひとつの時代が終わり、また次の時代が始まる。それは、雨が上がってからりと晴れた日が訪れるように、さりげなくやって来るものなのかもしれない。

今日もまた、窓の外で孔雀の鳴く声がする。キリスト教の伝承では、孔雀は日輪を象徴するらしい。このことから、不死のしるしともなっているそうだ。その尾は、星空を思わせるような荘厳さだ。

時間は直線上に進み、いつか終わりがあるように私たちは思うものだが、案外、そのように単純なものでもないのかもしれない。はじまりは終わりであり、終わりははじまりである。孔雀は夏の長い夕暮れを歓び鳴いているのか、やがて訪れる夜を厭うのか。街のシンボルであるレオン氏の声を窓の向こうで聞きながら、今日も眠りにつく。世界が少しでも明るい方向に向かいますようにと、願いながら。

◆リヨン風信(二十八)◆

救済の技法

中川莉羅

桜の花が散ってしまった。けれど透明な風の中に鮮やかにチューリップが光っている。いつもならば視界の端でかすんでいる花でしかなかったのに、ふとその美しさが目前に迫ってくる。青空を流星のように飛行機雲がゆく。まるでパラレルワールドに移行したかのように、街はことのほか静かである。

四月三日からフランス全土でロックダウン政策が再開された。昨年度の三月に開始された第一次ロックダウンから、早いもので一年過ぎたことになる。そうこうしているうちに大学での二学期は終わりに近づきつつある。二週間のイースター休暇を挟み、五月の初旬に最終試験が行われることになっている。

今年の四月五日はイースター(Pâques)の翌日で、祝日だった。「復活祭」を意味するこのイベントは、日本ではあまり馴染みがないが、十字架にかけられて亡くなったイエス・キリストが三日後に復活したことを祝う、キリスト教徒にとっての大事な祝祭日である。近所のスーパーマーケットでは、色とりどりのイースター・エッグやウサギのぬいぐるみが、日焼け止めやソーダ水などに紛れて陳列されている。卵は誕生、復活を、ウサギは繁殖力を象徴する。コロナ渦においても、やはりフランス人にとっては大事な伝統行事であるらしい。

「イースター？　祝ったわよ」と、オンラインで日本語のレッスンを受講してくれている十四歳の少女は言う。

「子どもの時と同じようにね。庭に埋められた卵の形のチョコレートを探すの。

もちろん、昔みたいにはワクワクしないけどね。それよりも、私は日本のアニメを観ている方がいい」と、いかにも思春期の少女らしい答えが返ってきた。

近年ではキリスト教離れが進み、イースターにおける宗教的な意味合いは薄れてきている。現代社会において肉体の復活を本気で信じる人間は少数派だろうけれど、魂の再生というテーマはどうだろうか。古代エジプト神話に由来する不死鳥伝説、ダンテの『神曲』、日本においては三島由紀夫の『豊饒の海』など、魂の放浪と復活をテーマにした作品は数多く存在する。また、それは必ずしも来世の話とは限らない。生きている間にも、私たちは何度も終わりと再生を繰り返す。蝶へと変異を遂げるさなぎのように。

先日、友人と映画を観た。トマス・ヴィンターベア監督による二〇一二年のデンマーク映画『偽りなき者』である。舞台は、クリスマスを迎えるデンマークの小さな村。主人公のルーカスは妻との離婚後、幼稚園の教師として働いている。息子のマルクスとの関係は良好だが、妻が息子を手元に置い

ておきたがるため、ルーカスは独り暮らしである。友人テオの娘のクララは、ルーカスの勤める幼稚園に通っており、彼に好意を寄せている。贈り物を受け取ってもらえないことに腹を立てたクララは、幼稚園の園長に意味深長な告げ口をする。それはちょっとした悪戯でしかなかったが、ルーカスは児童虐待の濡れ衣を着せられてしまう。ルーカスは職を追われる。いわれのない近隣住民からの攻撃を受け、ついには警察に連行されてしまう。証拠不十分のため無罪となり釈放されたルーカスは、徐々に周囲との関係を修復していくが、漠然とした悪意は一生彼に付きまとう。

この映画の中では、傷心の男性が誇りを取り戻し、再生していく様が描かれている。印象的だったのは、スーパーマーケットでの買い物を断られ、店員から暴力を受けても屈せず、何度も立ち向かっていく主人公の姿である。額から血を流し、みじめな有様で帰宅する彼を、街の人々が奇妙な目で見つめる。彼はその後シャワーを浴び、正装してクリスマスのミサへ行く。頭を高く上げ、背筋をぴんと伸ばして。「救い」とは他者からもたらされるものではなく、自分自身を救う行為なのだと、きっと彼は悟ったのだろう。誰もが彼を離れていったとしても、彼自身だけは、自分を裏切らない。救済の技法とは、そのようなことを言うのだろうか。

映画を観終わった後、私は果たして彼のようになれるだろうかと思った。どの国のどの社会に生きようとも、誇り高く歩くのは、なんと勇気のいることだろう。社会に迎合するのは簡単だけれど、代償は高くつく。

「オマエタチが日々疲れているのは、心からやりたいと思わない努力を強いられ、そうしなければ生存する資格を剥奪するぞと脅されているからだ。良い市民という美名で呼ばれながら」とは、音楽家の平沢進氏の言葉である。

私たちの住む社会では、ただぼんやりと生きているということは許されない。ここに生きるということは、名前や国籍や生年月日、住所、電話番号、社会的身分などの情報によって裏付けされた存在であると、常に証明し続けるということだ。「中川莉羅」というぼんやりした概念でしかなかったものが、ここでは一つのテーゼであり、問題提起である。すべては正当なる技法に則って論じられなければならない。ここに生き続けるために。だが、本当にそうだろうか。

近所の教会に行き、祈る。ステンドグラスが光の破片となってきらめく。祭壇に炎は灯っていなくても、しんと、何かを待っているような空間。私の祈り方はまるで正しくない。私がすがるのは、名前のない神である。幼いころ、悪夢を見そうになると心の中で呼びかけた神。でたらめな神。洗礼やら復活祭やらとは無縁の神。崖っぷちに立たされて、もうこれまでかと思った時、いつもその名もなき神は現れた。けれど今、自分を救うのは自分なのかもしれない。

教会から出ると、マグリットの描くようなくっきりと晴れた空である。母親に連れられてシャボン玉を吹いている子どもを見かけた。シャボン玉は、エメラルドグリーン、インディゴ・ブルー、ライト・イエローへとくるくる色を変えながら宙を舞う。子どもはシャボン玉を吹くための正しい技法など、考えたこともないだろう。けれど彼の目には、世界は鮮やかに輝いて見えているだろう。私たちの誰もが、きっと輝く魂を取り戻さなければならないのだ。

◆リヨン風信(二十七)◆

『春の泥』

中川莉羅

早春の午後、街を散歩していると青空に白い花がちらついている。近寄ってみると確かに桜である。日本での堂々たる雄姿と人々の桜への熱狂ぶりを見慣れている私にとって、異国の地にぽつんと桜の樹があるのはなんだか不思議な気のするものだった。まるで見知らぬ街にひっそりと引退したかつてのスターを見るような心持である。しかし桜は、誰からどう思われようと気にするでもなく、ただ春が来たから、とばかりに淡々と咲いているのだった。

リヨン・カトリック大学での通学授業が始まった。といっても、インターネットでの授業が週三日、残りの二日は通学制である。友人宅のあるタラールは小さな田舎町なので、リヨン行きのバスの本数は一日に三本。朝五時に起きて六時過ぎのバスに乗る。空を見上げると、春先の三日月がまだ暗い空にひっかかっている。大学の授業が終わると次のバスまで

時間を潰すためパソコンルームで宿題をする。夜七時半頃、帰宅すると友人が待っていてくれる。けれど冬休み中に毎日一緒に観ていたテレビドラマシリーズを楽しむ気力もなく、ベッドにもぐりこむ。甘く重い春の泥の中で眠るもぐらのように。

一時的とはいえタラールに引っ越しをしてみると、不思議なものですっかり腰を落ち着けてしまうものだ。リヨン・カトリック大学に週二回通っているものの、コロナ渦ということもあり、以前のように気軽に出歩くことはできない。しかし先日、仕事の用事でリヨンに足を運ぶ機会があり、まとまった空き時間が出来た。このままタラールにとんぼ返りというのも勿体ないと思い、少しリヨンを散歩することにした。

勤務している語学学校は、以前住んでいたアパートから十五分ほどの距離にある。仕事帰りによく立ち寄ったスーパーマーケット、子どもたちの声の響く小さな公園、毎朝大学に通うために渡ったローヌ河などが当たり前に目の前に見えてくる。なつかしいというよりも、そのままリヨンのアパートに戻って眠ってしまいたくなった。憂鬱な春の曇り空は昨日の続きのようで、ああ早くあたたかいベッドに戻って何も考えずに眠れねむれと、ささやくのだ。しかしあのアパートは、もう私の帰るべき場所ではない。「貸し部屋」の札のついたインターフォンの表示をしばらくずっと見つめていた。

そこからさらに足を伸ばして、大きな噴水のある市庁舎広場(Hôtel de Ville)、そして旧市街地(Vieux Lyon)へと向かう。中世の魔法使いが住んでいそうなその街は、そろそろ店じまいを始めているところだった。観光客向けのお菓子屋さん、ラベンダーの香りのする石鹸のお店、アイリッシュ・パブなどが幻のように街灯の中に浮かび上がる。それはどこか遠い国のおとぎ話めいた街のようだった。まぶしい夏の光の中で美術館を訪れたり、テラス席で友人たちとお喋りをした日々が映画のワンシーンのように蘇る。けれど今、魔法は消えてしまった。大聖堂の入り口は固く閉ざされている。人々はそれでも薄闇の中、広場の階段に座ってクレープを食べたり、おしゃべりしたりしている。立ち去りがたくて、街頭演奏者の弾く物悲しいバイオリンの音をしばらく聴いていた。

リヨンに住んでいたころ、しかし、美しい景色に毎日胸を焦がしていたかというと、必ずしもそうではなかった。夜のローヌ河を渡り、仕事から疲れて帰ってくる私の目には、銀色の翼をひるがえして渡る鴎の群れも、大聖堂からこぼれる優しい光も、まったく見えていなかった。ここにいた日々が明日への不安で埋め尽くされているとしたら、なんと悲しいことだろう。

春らしい陽気になってきたある日曜日、友人がジョギングに行こうと誘ってくれた。大学での勉強と将来への不安に倦み、毎日暗い顔で過ごす私を見かねて、運動不足とストレス発散を兼ねてとのことである。近所のグラウンドで三十分間の軽いジョギングと、ジャンプや腕立て伏せなどのエクササイズ。情けないことだが、トラックを一周するにも息切れがして走り抜けない。日本にいたころは毎日スポーツジムに通っていたのにと悔しくなった。

「立ち止まっちゃだめだ。せめて一周はしなくちゃ。今は苦しくても躰がじきに慣れてくるから」

と友人。やけくそで走りだすと、肺の奥にたまった汚れた空気と、ついでに愚痴や泣き言がどんどん言葉となって出てゆく。友人は「それでいいんだ」と言いながら一緒に走ってくれた。

走っている最中は、苦しくて、苦しくて、もうまっぴらだと思う。けれど帰宅するころには心地よい疲労感が躰中に広がり、頭は軽くすっきりしている。全力で走り続けているこの日々も、いつかこんな風に愛おしくなるのだろうか。

アーティストとして独立を目指し始めた友人は言う。

「自分の好きなことを探しなよ。僕だって、アーティストとしての自分に長い間自信がなかったんだ。でも、やっと最初の一歩を踏み出そうとしているんだよ。いつ、どうやって夢が叶えられるかは誰にもわからないけれど、本気でその道を選んだ瞬間から、すべては変わり始める。まるで神様が助け

てくれてるみたいにね。ただ、どの夢を選ぶかは僕たち自身でしか決められない。誰もお膳立てしてくれないんだ」

そういう友人はここのところ、夜遅くから朝方までデッサンをしている。大好きな音楽を聴き、時には踊り、時には苦しみながらも、楽しそうである。

一方の私は、友人の横で終わらぬ勉強に苦しんでいる。フランスに来ることだけを望んでいた私の背中を押していた風が、いまさらになって止まってしまったようである。どう生きればいいかわからなくて、ただ言われるがままに生きている。自由を求めてこの国に来たはずなのに、嫌われたくなくて、間違えたくなくて、「確実」な道にしがみついている。皮肉なものだ。いずれにせよ、このままこの国からドロップアウトしても、おそらく私は誰の人生にも影響を与えないだろう。誰からも見向きのされない桜のようだ。

それでも、春のきらびやかな風は確実に花の香りを届けてくれる。「今にみていてごらん、明日になったら、きっといいことがあるから」とささやくかのようだ。日本にいた時はJ-popなどほとんど聴かなかったのに、ここではまるで二十歳の女の子が聴くような音楽を聴いている。爪にマニキュアを塗り、髪の毛をみつあみに結い、ノートに弱気な言葉と夢を書きなぐる。未来はふたたび真っ白になったのだ。明日はわからぬ身である。どうせわからぬのなら、小説家になろうなどと、嘯いてしまおうか。しかし無責任な未来を描くにはもう遅すぎる。「痺れるくらいに格好いいから、フランス語を勉強する！」と、ただそれだけの理由でフランス語を学習しはじめた無鉄砲な若者の頃の自分に戻りたい。

暑すぎるほどの陽気で躰中の細胞が沸き返るかと思えば、次の日の天気予報は雨。極端な天気である。地面を勢いよく蹴って走り出したくても、すぐに息切れがして早春の泥の中でうずくまる。あと少し、もう少し。早く春になれと、切に願う。

◆リヨン風信(二十六)◆

バレンタイン

中川莉羅

フランス全土で外出制限措置の緩和が行われ、昨年の十二月十五日より夜間外出禁止に移行した。十八時以降の外出は厳禁だが、ロックダウン政策とは異なり、生活の自由がある。街を歩くと近くの小学校から子供たちの笑い声が聞こえてくる。

私の通うリヨン・カトリック大学では、遠方に住んでいる生徒への措置としてインターネットでの受講制度も通学制度と同時に許可されている。しかし、二月の冬休み明けにはすべての授業が通常通り大学で行われることになっている。

タラールの友人の家に居候させてもらって以来、約三か月が過ぎた。気前のいい友人は、アパートが見つかるまで遠慮なくいていいよと言ってくれる。しかし、いつまでもその言葉に甘えているわけにもいかないので住宅情報を探すのだが、なかなかうまくいかない。一度などアパート見学のため現地に赴いたものの、担当者が来るまで雪の降る中小一時間待たされた挙句、書類不備で突き返されたこともある。

「タイミングが悪いときにじたばたしたって仕方ないよ」と友人は言う。

「君がここにいることにも、きっと意味があるんだろう。僕は経済的に君を助けてあげられるし、君は時々僕の話を聴いてくれればそれでいい。助け合いってことさ」

そうして私は相変わらずここにいる。嵐の夜に山小屋でうずくまるみなしごのように。

毎週土曜日、友人はマルシェに野菜を買いに行く。友人の妹さんご夫婦が農場を経営されており、そこに出店しているというご縁もあり、お蔭様で私も恩恵に預かっている。

「安い、安い！　二十ユーロ（約二五〇〇円）でこんなにたくさん買えた！」と友人は大きな袋を抱えてほくほくして帰ってくる。真っ赤なトマト、可愛らしい芽キャベツ、香りのいいセロリにウイキョウ、大きなズッキーニ、みずみずしいレタス、ほうれん草、にんじん、アボカドにじゃがいも、バナナ、りんご、グレープフルーツ。まるで家が八百屋になったようだ。フランスはアメリカについで世界第二位の農業国と言われるがそれにも頷ける。どの野菜も果物も新鮮で力があり、口にするとずっしりした存在感がある。まさに「命をいただいている」という感じである。そうしてこれらの野菜をざくざく切り、大きな鍋で煮込んでスープを作る。浅葱、クミンシード、ガーリック、オニオンチップスなどの調味料をたっぷり入れて。

街に出ると、バレンタインデーとイースターが一緒くたになって店に並んでいる。ファンシーなリボンに彩られたチョコレートや、ふわふわしたウサギのぬいぐるみが、どこかなおざりに陳列されている。この国はどうかしてるねと友人は言う。しかしフランスには日本のような華々しいバレンタインの戦略といったものはないらしく、有名ショコラティエが作ったブランドチョコレートだの、デパートのお菓子売り場に延々と列を作る女性たちなどは見かけない。そもそもバレンタインデーとは、フランス人にとってはあくまで恋人たちが二人で時間を過ごすためのものであるらしい。イニシアティブを取るのは男性の方で、当日は恋人や妻に花束を贈ったりレストランに招待したりする。日本のように女性が義理チョコを贈るしきたりや、ホワイトデーの習慣はない。一説によると、チョコレートを贈る習慣を日本に広めたのは某製菓会社の戦略によるものとも言われている。

バレンタインの由来はローマ時代にまで遡る。当時ローマでは、二月十四日に女神・ユーノーの祝日があり、翌二月十

五日は、豊年を祈願するルペルカリア祭の日であった。当時若い男女は別々に生活しており、祭りの日は出会いのチャンスでもあったのだ。祭りの前日、女性たちは自分の名前を記した札を桶の中に入れておき、翌日、男性たちは桶から札を一枚引く。札に記されている名前の女性と男性は、祭りの間パートナーとして一緒に過ごす。そして多くのパートナーたちはそのまま恋に落ち、結婚した。まるでおみくじを引くかのように偶然に選ばれたパートナーだが、それは神の意志によるものと考えられていたのだ。その当時、神の意志は至るところに及んでいた。ケルト系民族は王位継承者を選ぶ際に神託を利用していた。民族のために自らを犠牲にし、神に身を捧げなければならないと告げられれば、人々は従ったし、ローマ軍から残虐な扱いを受けて盲目になったとしても、それは神の定めであると考えられていた。

現代社会では、私たちは自分の意志で人生を選択できると考えられている。大学進学、就職、結婚、出産など様々な機会において自分の力で決断することを求められる。努力によって運命は変えられると、だからこそ前向きな考えと良い習慣によって人格形成をし、強さを身に着けなければならないと、多くのメッセージが訴えかけてくる。けれど本当にそうだろうか。自らの意志で入社を希望した会社が倒産することもあるだろうし、愛する人と一生添い遂げると誓ったとしても、ある日運命のいたずらによってそれが失われてしまうこともある。

愛は人を強くもするが、時に弱くもする。天へ飛翔する翼を与えるが、金の檻に閉じ込めることもある。夢の中でささやかれる愛の科白は、どこか神託めいて響く。ルーン文字で書かれた手紙のように、すべての言葉は暗号化され、万華鏡の向こうで恋人たちは奇妙なダンスを踊る。見慣れていたはずの顔がぐにゃりと曲がり、愛の言葉は黒魔術と化す。白は黒で、黒は白。エッシャーのだまし絵のように、どちらも真実でどちらも虚飾である。どちらを選ぶかは私たちの自由意志によるとしたら、それは恐ろしいことなのかもしれない。

日本とフランスの文化を紹介するビデオを製作している一環で、ある日仏ご夫婦と知り合いになった。フランス人のご主人と日本人の奥様、そしてお二人の可愛らしい男の子がいるご家庭である。新しく知り合いになった、そのフランス人の男性はこう言う。

「僕は色々な経験を経たのち、こう思うようになった。誰かと一緒にいる中で、常に自分を偽り続けていなくちゃいけない関係なら、いらないって。だってそうだろう？　相手に気にいられるように、いつもビクビクして自分を隠していなくちゃいけないなら、いったい誰のための人生なんだろう。僕は今の妻と出会って、僕自身のまま、生きていると感じるんだ。心は相変わらず自由だけれど、妻との信頼関係を大事にしているし、彼女も僕を信じている。それって最高じゃない？」

その言葉は深く胸に響いた。虚飾や小手先の戦略などない、まっすぐでシンプルな愛がそこにある。トマトをすとんと切るように。そして彼らはたっぷりの野菜を煮込んで美味しいスープを作るのだろう。運命も神託もなく、家の中の優しい光に守られて。

春に向かう生ぬるい風が吹くかと思えば、零下五度を迎える日もある。外に出ると真っ白な雪が目にまぶしい。ざくざくと雪を踏みしめ、いつものスーパーマーケットへと向かう。春の訪れはまだ少し先のようである。

◆リヨン風信（二五）◆

『プレゼント』

中川莉羅

十月二十九日から始まったロックダウン政策はクリスマスシーズンのみ緩和となり、街にも活気が戻ってきた。プレゼントを買う人々、美しく飾り付けられた通り、教会の広場には大きなクリスマスツリー。暗く冷えていた空気がほんの少し華やぐようだ。毎年恒例の「光の祭典」は中止になったものの、クリスマス前の魔法めいた気分がそこかしこに感じられる。

私の所属する文学部教育学科では、幼稚園での研修科目が義務付けられている。三月に行われたロックダウンとは違い、今回のロックダウンでは、大学を除く教育機関は門戸を開いている。とはいえ、コロナウイルスの影響で実習生の受け入れ機関が大幅に限定されてしまい、多くの学生が苦戦していたようだ。

私はといえば、ありがたいことに、リヨン第三区のとある幼稚園での研修を許可していただいた。アルメニア移民のマルカリアン、パパジアン両家によって一九八八年に創設されたこの学校は、幼稚部と小学部から成り立っており、二十三名のアルメニア系フランス人生徒が通っている。

アルメニアとフランスの歴史的繋がりは第一次世界大戦に遡る。フランスは、大戦中に行われたトルコによるアルメニア人大量虐殺（ジェノサイド）を非難しており、二〇〇六年

にはフランスの国民議会が「アルメニア人虐殺否定禁止法」を可決した。このジェノサイドによるアルメニア人移民をフランスは受け入れた。現在、フランスには約六〇万人のアルメニア人やその子孫が在住し、その数は西ヨーロッパ最大規模に達している。

しかしながら、十月末には痛ましい惨劇が起こった。ナゴルノ・カラバフ自治州の独立を求めるデモ運動で、アルメニア人がトルコ人によって襲撃される事件がリヨン市内で起こったのだ。さらにコロナウイルスによる交通機関の麻痺も予想され、研修は一時先送りとなったが、十一月末にようやっと実現されることとなった。

タラールからリヨンまでバスに揺られること約一時間。そこからメトロに乗り換え、研修先の幼稚園に向かう。研修は四日間、午後一時半から四時半まで続く。ロックダウン期間中、買い物と散歩以外の外出は禁止されていたので、研修の初日は街の活気に戸惑った。まるで時間の存在しない異空間から地球に降り立った宇宙人のような気持ちだった。体の奥にしまいこまれていた細胞たちが、もそもそ動き出す。もたつく足を動かし、夢の中でもがくように進み、何度も道を間違えた末にやっと目的地にたどり着く。幸い、研修先の幼稚園には偶然にも大学のクラスメートがおり、これまでの様子を報告してくれた。

私たちが研修生として見学するのは、五歳の子どもたち二七人で編成されたクラスである。主任の担任教師の他に二人の副担任がおり、授業はすべてフランス語で行われる。図画工作、体操、算数、アルファベットの練習、歌など様々な科目に分かれており、文部科学省の定めたプログラムにしたがって進められる。まだ小さい子どもたちは、はさみを使うにも、絵の具を塗るのにも一苦労である。幼い指がけがを負わないように、先生方は手取り足取り道具の使い方を指導する。

おやつの時間には、子どもたちは校庭に出ることを許可されている。真っ赤なほほをした可愛らしい金髪の少女が休み時間中に話しかけてくれた。

「ねえ、知ってる？私のママは、ジュヌヴィエーヴっていう名前なの」

とても大切な情報を打ち明けるように、彼女はそのメッセージを私に伝えてくれた。そしてはじけるように笑って教室の方へと駆けて行った。

子どもたちは、小さな体の中にすでにしっかりと魂を持っている。この世に来てからまだ五年ほどの彼らの目に、世界はどのように映っているのだろう。きゃらきゃらと笑いなが

ら、子どもたちは校庭を走り回り、光の中で小さなステップを踏む。彼らは大人がいなくても十分に幸せであるように見える。こちらが手を振れば子どもたちも手を振り返す。こうして四日間の研修が終わった。

研修の最終日、近所の教会に足を運んだ。光の差し込む神の家に一人でいると、子どもたちの笑い声がどこからか聞こえてくる。ステンドグラスがまばゆく輝き、静寂が胸に染み込む。私の大切な人々が、どうか健やかに生きてゆけますように。先行きは不安定だけれど、誰にとっても明るい未来が待っていますようにと祈った。

研修が終わると、その内容をレポートにまとめて送らなければならない。そして十二月中旬には期末試験があり、二週間の冬休みをはさんで一月初旬にも試験の続きが行われる。試験科目は総数十一科目。一試験につき三時間から四時間かかる。ギリシャ神話の神々や十九世紀のフランス詩人たちの名前、そして言語分析、意味論、形態論、さらにラテン語の文法が頭の中をめちゃくちゃに駆けずり回って私を苦しめる。己の学力と知識不足との闘いの日々である。ストレスを抱えている私を見かねて、昔ながらの友人が私にこう言ってくれた。

「ねえ、日本人である君が大学にいるだけでもう十分なんじゃないの？　フランス人の学生たちと対等に渡り合えると思うのが間違いだよ。君は君にできるベストを尽くして、あとはコントロールを手放すのがいい。『なんでも完璧にこなさなければ』っていう、その考えを捨てなくちゃね。」

そしてインターネットサイトで買ったという大きなもみの木を段ボールから取り出し、私に飾り付けを手伝うように言った。それは本物と見間違うほどの、立派なツリーだった。

先日、店で買った豪奢なリボンも、きらきら輝くガラス玉も、箱の中に収まって封を解かれるのを待っている。

　こんなことをしている場合じゃない、まだまだ試験がたくさん残っているのに、勉強しなくてはいけないのに…。という私の不平をさらりとかわして、友人は楽しそうに飾り付けを始めた。ベルの形のオーナメント、エメラルドグリーン、淡いピンク、あるいは金色に光るガラス玉。つられて私も手伝いを始めた。ジングルベル、ジングルベルと、気が付くと鼻歌を歌っている。こんなに楽しくて素敵なことを拒否するなんてどうかしていたと、その時思った。

「子どものころ、家にあったのはちっぽけなクリスマスツリーだった。それでも、クリスマスが来るだけでものすごくわくわくしたんだ」

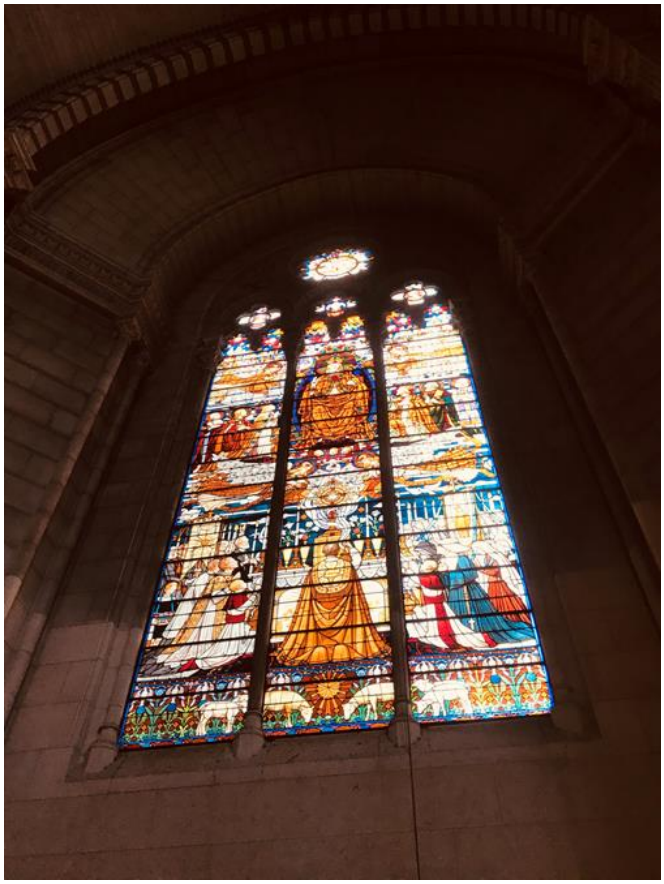
と友人はいう。

「大人になってから、ほしいものはみんな手に入れたのに、あの頃みたいな純粋な歓びを感じることはもうできない。いったい、人間ってやつはどうなっちゃってるんだろうね」

そして友人は、「実はプレゼントがあるんだ」と言って紙袋を渡してくれた。それはクリスマスのための飾り物で、雪だるまを抱えた女の子の置物だった。あたたかそうな毛糸の帽子をかぶったその少女は、どこか別の世界にいる幸せな女の子のように見えた。

　子どものころはすべてが夢のように美しく、日々はガラス玉のように輝いていた。動物は魔法の言葉を話し、空に浮かぶ雲は遠い国への招待状のようだった。

頭上を覆う鈍色の雲が去らなくなったのは、いったいいつからだろう。それでも、クリスマスの魔法はこの世から消え去ったわけではない。大人になった私たちは、山ほどの問題を鉛のように詰め込んで、それでもクリスマスの準備をする。サンタクロースはもういないとしても、ひそやかに用意されたプレゼントは、きっとこの世界のどこかで私たちを待っている。



◆リヨン風信(二十四)◆

人形の家

中川莉羅

蔦の葉が美しい紅葉を見せるころ、再ロックダウンの噂は現実のものとなった。エマニュエル・マクロン大統領の公式発表によると、期間は十月二十九日夜から少なくとも十二月一日まで。バーやレストラン、生活必需品以外の商店は閉鎖中だが、前回のロックダウンとは異なり、大学以外の教育機関は閉鎖されない。全面的な活動停止による経済への打撃を軽減するため、工場や農場は操業が許され、公的サービスの一部も稼働を続ける。前回と同じく、通勤や医療機関への受診、必需品の買い物や、一時間以内の散歩は許可されているが、外出の際には許可証が必要となる。違反者には罰金が科される。半ば予想されていたこととはいえ、フランス国民の動揺と失望は大きい。

時を同じくして十月二十九日、イスラム世界では預言者ムハンマドの生誕日が祝われた。同月十六日パリ郊外にて、歴史教師のサミュエル・パチ氏が預言者の風刺画を生徒たちに見せたことでチェチェン人によって殺害された事件は記憶に新しい。続いて二十九日、フランス南部の都市ニースの教会で、テロとみられる刃物による襲撃事件が発生し、三人が犠牲になった。このような殺伐とした状況の中、十一月四日アメリカ合衆国では大統領選挙が行われた。これを書いている十一月七日現在、結果はまだ公表されていないが、アメリカ合衆国のみならず全世界を揺るがすだろうことは容易に予想できる。まるで乱気流に突入した飛行機のように、世界中が狂乱への道を進んでいる。

私はといえば、このロックダウン期間中、リヨンのアパートを引き払って友人の住むタラールという街に一時的に滞在させていただくことになった。リヨンから北西に四十kmほど、バスに約一時間揺られていると、この小さな街に到着する。タラールはリヨンと同じくフランス南東部のローヌ県に位置しており、ボジョレーとも隣接している。友人の家は教会のすぐ裏手にあるため、澄んだ鐘の音がよく聞こえる。携帯電話のアラームで慌ただしく時間を十分刻みにしなくても、ここでは時間は悠々と流れている。大学のオンライン授業の合間を縫って、時折短い散歩をする。近所のスーパーマーケットに足を延ばせば、青々と茂る山が光を浴びてきらめくのが見える。新しい知識をぎゅうぎゅうに詰め込まれてパンクしそうだった頭が、少し軽くなる。人間社会がどのような状況であっても、自然は毎日私たちに新鮮な美しさを届けてくれる。その寛大さは奇跡のようだ。幸い、タラールは小さな田舎町なので（ロックダウン期間中という理由ももちろんあるが）人通りは少なく、生活は静かである。

それでも、インターネットからは情報が波のように毎日押し寄せる。一つ一つの出来事はくるみのように押しつぶされ、変形され、きれいな包装紙にくるまれて提供される。生々しいむき出しの形をさらさないように。外の世界で起こっていることに目をつぶって生きていくことは可能だ。人間の魂はエゴイストに出来ているのだから、自分の身に直接の被害が降りかからない限り、何が起こっているのかを実際に体感することはとても難しいことだと思う。世界の裏側で暴力に苦しんでいる人々がいるとしてもその痛みはリアルに共

有できないし、ハリケーンや山火事がどこかの国で荒れ狂っているとしても、それはテレビ画面にちらりと映る日常生活の中の一場面でしかない。そういった意味で、日本に住んでいたころの自分は盲目的に生きていたと思う。世界のニュースよりも日常生活の中のこまごまとした息苦しい義務の方が大事だったのだ。しかし今、こうしてフランスに身を置いてみると「知らなかった」では済まされないことがたくさんあることに気づく。光に背を向け闇の中にとどまっているのは私自身であり、ソクラテスの言葉の通り、その無知は罪に値するのかもしれない。

　イプセンの『人形の家』のように、私たちの誰もがきっと狭い小さな世界に閉じこもりささやかな生活を守ろうとしている。押し寄せる情報の波に怯え、無数の矛盾やフラストレーションを抱えながら。それでも歓びを選ぶか苦しみを選ぶかは私たち一人ひとりの責任なのだ。

　アメリカのテレビドラマシリーズ『ツイン・ピークス』に出てくるデール・クーパーというＦＢＩ刑事がこんなことをいう。

「毎日、一日一回自分自身にプレゼントを贈るんだ。何も考えず、ただ起こるがままに。歓びを先延ばしにしちゃいけない。たとえば一杯のブラックコーヒーとかね」

結局のところ、自分自身に贈り物をしてあげられるのは自分しかいないのだ。外の世界で何が起ころうとも。

　毎年恒例のリヨンの光の祭典や、クリスマス・マーケットの開催も中止され、今年はきらびやかなクリスマスなど望めそうもない。それでも人々はプラスチックのもみの木とケーキを買い、ささやかなお祝いをするだろう。それぞれの小さな家の窓に光の粒が灯るだろう。

◆リヨン風信（二十三）◆

光

中川莉羅

早いもので、あっという間に十月になってしまった。秋など永遠に来ないのではないかと思われるほど暑かった九月から一気に冷え込み、小雨の降る日々が続いている。朝七時、家を出ると空はまだ暗く、三日月が浮かんでいるのが見える。ローヌ河に架かる橋はライトアップされて美しく輝き、鷗たちが銀色の飛行機のように夜開けの空を横切る。

今年の九月、リヨンカトリック大学の文学部教育学科に入学した。昨年度までは同大学付属の語学学校に通っていた。国籍も年齢もまちまちな外国人留学生に混じって気楽な気持ちでフランス語を学んでいた頃とは違い、大学のクラスでは若いフランス人の学生だらけ。振り落とされまいと必死で授業にしがみつくので精一杯である。幸い、先生方もクラスメートも非常に感じのいい方ばかりで、日本人学生の私にもとても優しく接してくださる。復習を手伝ってくれたり、ランチを一緒に食べたりする友達も出来た。学生時代に戻ったような、奇妙な気持ちである。

大学の教科は非常にバラエティーに富んでいる。十九世紀のフランス文学や詩、世界の文学、芸術と文学、文学の分析的手法、文法と綴り字、心理学、教育現場における研修とその理論、第二外国語としての英語、そしてラテン語である。若い学生たちは誰もがしっかりと自分の意見を持っており、復習にも余念がない。詩の授業にせよ、心理学の授業にせよ、テーマを分析し、論理を構築することに長けている。例えば、「芸術とは自然の模倣に過ぎないのか、それとも無からの再構築の試みなのだろうか」といったテーマについて、思想を育てる訓練を高校生の頃から受けているのだ。それは知識の伝達や効率性だけに重点を置く「詰め込み教育」とはまったく異なるも

のである。残念ながらそのような教養を持ち合わせていない私は、それでも、フランス文学や思想史といったものに日本での学生時代から漠然と憧れを感じていた。どこかで聞きかじった思想の切れ端をノートに貼り付けては、崩れ落ちそうなアイデンティティをなんとか支える日々だった。暗闇の中で小さな光を求める虫のように。

あの頃、ぼんやりとしたモノローグにしか過ぎなかったそれらの思想を、今ようやっと具現化する機会を与えられている。それなのに気力も体力もついていかず、頭がきしきしと音を立てて空転するのを感じる。正直に言うと、「まいったなぁ」という感じである。憧れだけを道しるべにここまで来たのはいいものの、さて、次の歩をどう進めるべきか。何のためにここに来たのだろう、この選択は本当に正しかったのだろうかと自問自答する日々が続いていた。

そんなある日、クラスメートがラテン語の復習を一緒にしないかと声をかけてくれた。ラテン語など習ったこともなく、複雑な文法に頭を悩ませていた私は、二つ返事でその提案を受け入れた。

「日本人であるあなたが、フランス語の説明によるラテン語の授業を受けているなんて、とっても複雑だわ。きっと困っているんじゃないかな、と思って。私でよければ力になるわ」と彼女。

そのような気持ちで見守っていてくれた人がいることに驚くと同時に、彼女の深い洞察力と温かい心遣いに感謝の気持ちでいっぱいになった。

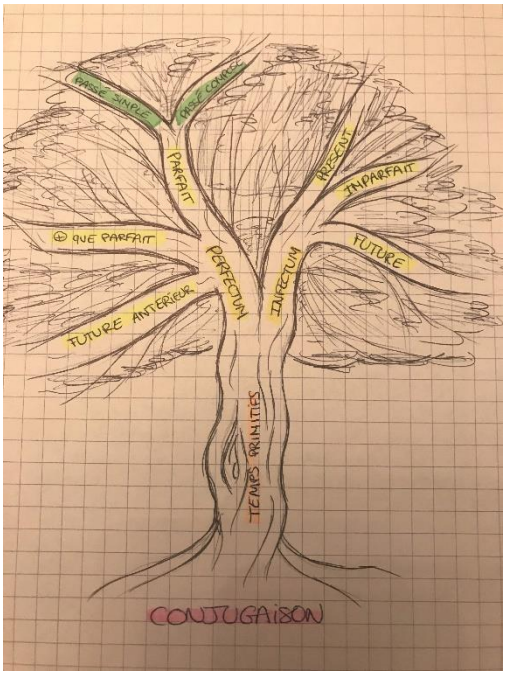
「初めて習うときは、ラテン語はすごく難解に見えるわよね。どうしようって、パニックになる。でも一度文法の規則を覚えてしまえばフランス語よりずっと簡単よ。ほらね」

と、彼女はこれまでの授業の内容を図式化してくれた。

「誰だって自分の勉強の方法があるでしょう？授業では、先生は一つのやり方しか教えてくれない。でも、言葉による説明だけじゃなくて、イラストや表にした方が覚えやすい人もいる。もっと自由な気持ちで方法を模索してもいいんじゃないかしら」と。

彼女はイラストやデザインが趣味だそうで、これまでの作品を見せてくれた。美しいカリグラフィーとキツネのイラストや、友人のためにデザインしたドレスなど、どれも独創的でセンスが際立っている。そして日本文化のファンでもあるという。

「日本に行ったら、本物の寿司を食べてみたいわ。リヨンの日本料理店といったら、寿司だのベトナム料理だの中華だの、アジア料理を全部ごちゃまぜにしてるんだもの」と彼女が言い、私たちは大いに笑った。



授業後、帰り道で色々な話をした。これまでどのような道を歩んできたのか、なぜこの学部を選んだのか、そして将来の計画など。

「私はね、未来のことなんて何もわからないわ。でも、きっとこの方向に行くんじゃないかなって感じることがあるの。もし運命というものが与えられているなら、私はその流れにオープンでいて、導かれるままに生きるわ。先のことはわからないけれど、恐れる必要もない。そうでしょ？」と彼女。

無限に続く日々の中に置かれた小さなスタッカートのように、その言葉は明るく響いた。

折しも世間では再ロックダウンの噂が飛び交っている。マスクでおおわれた口で人々はぼそぼそと歯切れの悪いジョークを飛ばし、電車の曇り窓から現れては消えてゆく光を見つめている。それでも、この日々を真珠のようにつないでいけば、いつか美しいネックレスになるのだろうか。私たちが答えを知るのは、まだ先のようである。

◆リヨン風信(二十二)◆

通り雨

中川莉羅

今夏もフランスは酷暑に喘いでいる。七月下旬から八月にかけて、パリおよびイル＝ド＝フランス地域圏（île-de-France）、シャンパーニュ地方（Champagne）、ローヌ地方（Vallée du Rhône）の一部、ブルゴーニュ地方（Bourgogne）など、フランスの中央から東寄りの地域一帯で最高気温四十度を記録した。オフィスや駅構内、スーパーマーケットや医療機関、商業施設などは別として、フランスの一般家庭には冷房設備がない。“Air climatisé”（当店は冷房が効いております）の看板を誇らしげに掲げるレストランやカフェを見つけると、駆け寄りたい衝動に駆られる。湿度が低いのでカラッとしているものの、やはりフランス人にとっても体温を超えるこの暑さは厳しく感じられるようである。日中はブラインドを下して扇風機を回し、夜は窓を開けて自然風を取り入れる。冷たいシャワーを浴びて水枕をして眠るなど、人々は工夫を凝らしているようだ。

私はといえば、七月中にビザ取得のため駆けずり回っていた足が、八月に入ってぱったりと止まってしまった。この時期は公共機関も含めみな一斉にバカンスに入るため、国中が麻痺してしまう。まるでフランス全土が眠りについたかのようである。こうなると泣いてもわめいても何も動かない。おまけにコロナウイルスの影響も色濃く残っており、行政機関も混乱している。幸い、先月提出した大学への願書が無事に受理され、残るはビザの延長手続きのみというところまで来ていたので、観念して悪あがきをやめた。「郷に入りては郷に従え」の精神である。

そんな折、今年の五月まで通っていた語学学校の先生とお会いする機会を得た。期末試験の課題の添削のためである。学期末の筆記試験といえば、与えられた議題に関して意見を記述するという形式だと思い込んでいた私の予想は、いい意味で裏切られた。今年のテストはより自由で創造的な課題を出題しようという先生方の意向で、生徒たち全員が各自短編小説を書くことを求められたのである。中心となるテーマは「移民の子ども」。例えば、日本人の子どもがフランスに移住することになったらどういった状況が想定されるだろうか。彼（または彼女）の遭遇するであろうカルチャーショッ

クはどのようなものだろう。アイデンティティの形成という面ではどうだろうか。…等々、私たち生徒は各々の立場からこのテーマに取り組んだ。幸い、日本という国は政治・経済の面では比較的安定して恵まれており、内戦などに苦しむこともない。日本人が仕事や学業などの理由で渡仏することは今日ではめずらしくないが、難民としてフランス国家の庇護を求める立場になることを想像するのは難しい。それでも、世界にはそうしたケースもある。この国の現状は、お伽話に出てくるような夢の世界ではない。小説を書くことによって、現在のフランスにあふれている移民問題をまた違った角度で検討する機会をいただいた。

先生にお会いする約束の日は、からりと晴れたある夏の日だった。クロワ・ルース(「赤十字」の意)と呼ばれる長く険しい坂道を登り切ったところで、広場のベンチに座っている先生と、小さな娘さんが目に留まった。華やかな赤いワンピースをまとい、長い髪の毛を三つ編みに結って夏の夕陽に目を細める先生は、長い旅行から帰ってきたばかりのようだった。そのそばで遊んでいる娘さんは、年のころは四歳ころだろうか。栗色の髪の毛と意志の強そうな大きな瞳が印象的な、とても可愛らしいお嬢さんである。噴水の周りに群れている鳩を追いかけたり、チョコレートクッキーをほおばったり、小さな赤いスクーターを乗り回したりと、ひとときもじっとしていない。この世界に来てからまだ四年。彼女の目に、世界はどのように映っているのだろう。私たちはしばらくその場で小説の話をしていたが、やがてお嬢さんが帰りたいと言い始めたので、先生のお宅にお邪魔することになった。

アート作品の飾られたお部屋に足を踏み入れると、可愛らしい三毛猫が出迎えてくれた。冷たいミントティーを淹れてくださった後、先生は私の小説を一ページずつ丁寧に添削してくださった。よく考えれば、原稿をメールでやり取りする方法もあったはずだ。こうしてわざわざ原稿を印刷して、鉛筆で添削していただく手間をかけてしまったことを思うと申し訳なくなった。それを先生に言うと、

「あら、私は紙ベースの方が好きなの。だって、メールで送られてくるワード文書をパソコン上で手直しするなんて、いかにも仕事って感じじゃない？そうじゃなくて、本を読むように楽しみたいのよ。私はあなたの元担任だけれど、なんていうか、今回の添削作業では編集者のような、読者のような気持ちでワクワクしながら読んだわ」とのことだった。

公園のベンチに座って、強い夏の風にはためくページをゆっくりとめくりながら小説を読むこと。眠る前のひんやりしたシーツの上でまどろみながら続きを読むこと。現実を離れてしばし夢の世界に浸ること。空想、幻想、謎、仮想現実。

小説の添削作業を、仕事という枠を離れた何か楽しいイベントとして受け入れてくださった彼女の懐の深さに感謝を禁じ得なかった。語学学校での授業はとっくに終わっており、先生にとって私はもはや生徒ですらないのに。

「私たち教員の立場も、怪しいものよ。コロナウイルスの影響で、外国人留学生が激減しているからね。まあ、しかたないわ。愉快な状況とはいえないけれど、バカンスを楽しむことにするわ」

別れ際、先生はふとそのようなことをおっしゃった。

そしてお別れの挨拶をするようにと、お嬢さんを促した。彼女は明るい栗色の瞳で私をじっと見上げる。はしゃぎすぎて汗ばんだほほにキスをして、私は暇を告げた。まだ明るい夏の夕陽を浴びながら、また長い、長い坂道を下りながら帰った。

未来は今のところ、誰にとっても不確かであるようだ。それでも、私たちは生きている限り、まだ笑うことができる。友人を招いてホームパーティーをしたり、夏の午後に冷たいデザートをこしらえたり、映画を観て夜更かししたりといったささやかな日々を繋ぎ合わせながら。

「嵐が過ぎ去るのを待つのではなく、雨の中で踊ることが人生なのです」

英国の作家でありドールハウスの専門家であるヴィヴィアン・グリーン氏の言葉である。

せっかちな私たちは、時折急いで答えを出したがるものだ。いつまでこの状況が続くのか。どの道を行けば生き残れるのか。何を信じて生きてゆけばいいのか。そうした問いに答えることは、夏休みの宿題を済ませるように手軽に終えられるものではない。けれど、明日がわからないということは、そんなに悪いことではないのかもしれない。天気予報だって当てにならないのだから。

時折、開け放した窓の外で雨の音が聞こえる。空からのシャワーは魔法のように木々の葉を洗い流し、暑すぎる空気を冷やしてくれる。次の日の晩は、きんと冷えた三日月が待っているだろう。

◆リヨン風信（二十一）◆

惑い

中川莉羅

七月のリヨンの天気は驚くほど気まぐれだ。開け放した窓から朝の冷気が差し込み、目が覚める。空は翳っており、上着を羽織ってスーパーマーケットに買い物に行く。しかし日中は太陽が勢いを増し、カンカン照りという言葉がぴったりの暑い夏の陽射しがやってくる。時折、思い出したように雨が降り、数時間後には何事もなかったようにからりと晴れる。まるでお天気屋の子どものようだ。

勤務していた日本語学校での授業が七月上旬に終わった。コロナウイルスの影響で、三月のロックダウン期間からの後半四か月ほどはスカイプレッスンを行ったことになる。生徒さんたちの話を聞くに、移動時間がかからなくていいという意見と、学校でクラスメイトと会って交流したいという意見に分かれたものの、ひとまず授業が終了して胸をなでおろしている。せっかくだからということで、授業が終了したのち日本食レストランで生徒さんたちと会食する機会を得た。実際にお目にかかるのは本当に久しぶりだったが、彼らの日本語学習に対する興味と情熱は尽きることがないようである。レストランでの食事中も日本文化についての質問が次から次へと飛び出してきて、大いに盛り上がった。

そのような折、この期間中に新しい命を授かった女性がいる。誰もが予想しなかった大混乱の状況の中のうれしいニュースであった。妊娠中、授業を受講できなかったことを悔やんでいたそうで、会食の当日になんと真っ赤な薔薇の花束を持ってきてくださった。本来ならばこちらがお祝いしなければいけないのに、恐縮すると同時になんと律儀な方だろうと感動した。しかし驚きはそれだけではなかった。楽しいひと時の後、生徒さんたちからさらに素敵なプレゼントをいただいたのだ。可愛らしい猫のモチーフのネックレスと、ボディソープのセット。そして一言ずつメッセージを添えたカー

ド。予想していなかったこのプレゼントに、胸の底からじわじわと熱い気持ちがこみあげてきた。

スカイプレッスン中は、インターネットの混線を防ぐため生徒さんたちのカメラとマイクは基本的にオフ。集中講義のように講師が文法を説明するスタイルであった。ともすると一方的になりがちな授業の形式で、果たして生徒さんたちにどこまで伝わっているのだろうかと手探りで進めていたのだが、曲がりなりにも自分のしてきた仕事が少しでも彼らの心に届いていたと思い、報われたような気がした。

七月十四日は革命記念日（Fête nationale）であった。いわゆる「巴里祭」の名前でお馴染みの祝祭日だが、今年はその日が火曜日にあたっており、企業によっては土日月火と四連休を制定しているところもある。この連休を利用して、昔馴染みのリヨン在住の友人たちとともに郊外の公園に足を延ばすこととなった。リヨン西部からバスを乗り継ぎ、三十分ほどで到着したその広大な土地は、公園というより「森」と呼ぶにふさわしい。それもそのはず、ラクロワ・ラヴァル公園はかつて貴族の支配する領土だったという。ヴェルサイユ宮殿を思わせるようなテラスから、「われは王である。皆の者、聞くがいい！」と大演説をぶちたくなる。私たちはおしゃべりしながら何時間も緑の中を歩いた。皆それぞれに問題を抱えているものの、明るい夏の日差しは悩みを笑い飛ばすかのようにきらきらと輝いていた。

七月はまた、私にとっては惑いの季節でもある。これまで通学していた大学付属の語学学校に今年も登録するか、あるいは本格的に就職活動をするか。二つ目の道を選ぼうとした時、まるで国中が私に反対しているかのように面白いほど次から次へと障害が現れた。

世間知らずな私は、フランスで就労ビザを取得することがこんなにも難しいとは思ってもみなかった。日本人を雇いたいと言ってくださる企業は確かに存在する。日本食材店、レストラン、そして日本語学校。ただし企業に勤務することがすなわち就労ビザの取得を意味するわけではない。外国人労働者を正規職員として雇うには、企業はそれなりの対価を支払わなければならない。フランス人でさえ職にあぶれるような世情において、わざわざ外国人を雇うからには正当な理由が必要であり(特殊な資格を持っている、あるいはフランス国家に貢献できるほどのスポーツや科学の才能があるなど)、普通の日本人にとっては「まず不可能」であるらしい。私自身も就職活動をする中で、そうした事情を痛感することとなった。こうした状況を打破すべく、方向性も皆目わからぬまま、暗闇の中であちこちもがいた。友人たちも「きっと方法があるから絶対にあきらめちゃ駄目だよ」と応援してくれた。

仕事の面接を受けたその足で旧市街地へと向かい、フルヴィエールの丘を登った。四年前に旅行で訪れた時とまったく変わらぬ青空の下、くっきりと聳え立つ大聖堂。コロナウイルスの影響で観光客の数は減ったものの、疲れ果てた旅人たちをステンドグラスに描かれた聖者たちが優しく迎え入れる。この街は何一つ変わっていない。二〇二〇年の七月某日というページから日本人が一人消えたとしても、きっと変わらず営みを続けてゆくのだろう。

リヨンを離れることになるかもしれないと、つむじ風のようにふと予感が胸を駆け抜けた。大好きだった友人たちともう会えない、この美しい場所に二度と戻れないのかもしれないと思うと、涙が止まらなかった。自分がどんなにこの街を愛していたのかその時初めて知った。そして同時に、生活者としての自分がいかに感性を鈍らせてしまったことかとも思った。美しい夜のローヌ河は仕事帰りの疲れた目にぼんやりとかすんで見え、旅行の度に必ず立ち寄っていた美術館も訪れなくなってしまった。ベルクール広場の太陽がどんなに明るく輝いていても、私の頭は期末試験や家賃や仕事のこと

でいっぱいだった。私は幽霊のようにこの街をさまよっている異邦人にしか過ぎない。風に吹かれればあっという間に飛ばされてしまう。

東に向かえば西へ行けと言われ、南を目指せば北へ戻れと言われる。急がなければ間に合わないとせき立てられ、混乱した頭で出した結論は穴だらけだ。どの選択が正しいのか、どの道を行くべきなのか。運命のシナリオはすでに定められているのか、あるいは無限の未来を創り出すことができるのか。終わりのない問いにうんざりしていたある日、リヨン大学に向かう道すがら、次のようなメッセージを見つけた。

「みな、それが不可能であると知っていた。ある日、そのことを知らぬ者が訪れた。そして彼はそれを成し遂げた」（ウインストン・チャーチル）

見知らぬ街で道に迷って途方に暮れている時に、親切な誰かから話しかけてもらったような深い安堵を感じ、不覚にも道中で涙がこぼれてきた。人生はこうして私たちに時々ウィンクをする。七月のリヨンの空はまだ明るい。夜の九時でも午後三時と変わらぬような陽射しだ。ひたすらおおらかで暑い、暑い太陽は「心配するなよ。なんとかなるって」と肩をたたいてくれる友人とどこか似ている。私はここに残るだろうと思う。闘いはまだ終わっていないのだ。

◆リヨン風信(二十)◆

祈り

中川莉羅

初夏の陽射しがまぶしい。一歩外に出ればくっきりとした青空に綿毛のような雲が浮かんでいる。道行く人々は、ふと足を止めてカフェに立ち寄る。六月二日から飲食店の営業が再開され、街にも本格的な活気が戻ってきたようだ。五月十一日以降、フランスでは一部の小学校や小規模の店が再開されているものの、国民にはまだ慎重な対応が求められている。交通機関を利用する際にはマスクの着用が義務付けられ、大人数の集まる美術館やコンサートホールなどはいまだ閉鎖中である。私たちの通うリヨン・カトリック大学では、結局二学期中ずっとインターネットを通じての遠隔授業が行われた。

授業最終日、担任の先生のご提案によりピクニックをすることとなった。この事態の中、急遽帰国せざるを得なかった生徒や交通機関の麻痺のため参加できなかった生徒などいて残念だったが、合計七名のこじんまりしたグループでの最後の集まりとなった。ロックダウン期間中、ずっと閉鎖されていたテット・ドール公園もやっと門戸を開き、明るい光と爽やかな風、ボール遊びをする子どもたちの笑い声で満たされていた。

「ああ、やっと息が吸えるわ！　ロックダウン期間中、ずっと家に閉じこもりっぱなしだったんだもの。おまけに春のうららかな陽気の中でね」

とある生徒が言い、

「あら、私は却ってよかったと思うわ。だって冬の陰気な空の下で閉じ込められていたら、もっと鬱々としていたんじゃない？　窓の外が明るかったからなんとか耐えられたわ」

と先生が答えられた。

なるほど、物は考えようである。二人の女性教師を含め、偶然ながら女性だけのグループだったので、ヨガやダンス、料理などのことで盛り上がった。そして話題は各自の今後の動向について流れていった。学業を続ける生徒、新しい家庭を築く生徒、帰国するかどうか迷っている生徒などまちまちであった。将来は誰にとっても不確かであるようだった。

日本にいた頃は、翌日の予定が分からないということはあ

り得なかった。手帳は仕事のスケジュールで埋められ、翌週も翌月も翌年も同じような日々が続くことは分かり切っていた。明日は一体どうなるのだろうと頭を抱えることなどなかったように思う。けれど本来、生きるとはそういうことなのかもしれない。

学校に通っていた時にはあまり話さなかったポーランド人の女性と、ある日偶然街中ですれ違った。彼女は朝のジョギングをしている最中だった。この近所に住んでいるのだと言う。その時はその場で別れたのだが、朝の偶然の出会いは愉快な気持ちにさせてくれた。

先日、そのポーランド人の友人と、メキシコ人、そしてカメルーン人のクラスメートと会う機会を得た。カフェやレストランの営業が開始されたので、私たちは初夏の陽射しを楽しみながらテラスで再会を祝った。年齢も国籍もまちまちな私たちは、ウェブレッスンの感想やテストのことなど好き勝手に喋りちらした後、今後の計画について話した。

ポーランド人の女性は企業することを考えていると言い、メキシコ人の女性はこれから博士課程に進むつもりだと言った。カメルーン人の女性はマルセイユに引越して学業を続けると言う。私はと言えば、仕事探しをする傍ら語学学校に通うかどうか悩んでいた。誰もが明るい顔をしていたが、将来への不安を胸に秘めてもいた。明るい陽射しにも関わらず、突然ぱらぱらと雨が降りだした。何人かの客たちは突然の天気雨に笑いながら木陰へと避難した。明るい空の下、友人たちと別れた。

帰り道が同じ方向だったので、ポーランド人の友人と共に歩きながら、お互いのことを話した。様々な分野でキャリアを積み、化粧品のブランドを立ち上げ海外で販売していたこともあるという彼女は、さらに新しい挑戦をしようとしているらしい。

「今までたくさん働いてきたけど、もう上司にこき使われるなんて懲り懲りよ。これからは自分のために、そして同国人の助けになれるように働きたいの」と言い、笑顔を見せた。きれいに切りそろえられたブロンドの髪と青い瞳は太陽の光を浴びて輝いていた。私よりも年上の友人はこれからもさらに新しい道を歩もうとしている。そう思うと、くじけそうになっていた私の心に爽やかな風が吹いた。

友人に触発されて、しばらく怠けていた朝のジョギングを再開することにした。といっても持久力が続かず長時間は走れないのだが、朝の風と光を浴びて公園を駆けるのは清々しい気持ちがする。朝の散歩をする人、ジョギングをするグループ、自転車の練習をする子どもたち、観光客を乗せて走る小さな機関車。コロナウイルス騒動などなかったかのように、みな陽気に笑いさざめきながら歩いている。ラベンダーもアネモネも、きちんと手入れされて行儀よく風に揺れている。初夏の陽射しはきらめいていて、白い雲は映画のワンシーンのように静止している。

「物事はきっといい方向に向かいつつある」

なぜだか分からないが、ふとそう思った。池のほとりのベンチに腰掛け、光がちらちらと水面に反射するのを眺めている時、天啓のようにその言葉が降りてきた。数日間続いた曇り空の後、久しぶりに明るい陽が差したからだろう

か。私たちのどんな努力や絶望とも無関係に陽はまた昇る。物乞いをする家なき人にも、ハリウッドスターにも、太陽の光はふんだんに降り注ぐ。それはなんと気前のいいことだろう。

友人の教えてくれた〝On fait aller〟(なんとかなるだろう)と言う言葉をふと思い出す。人から「元気？」と尋ねられた時、調子が悪いのに「絶好調だよ！」と答えるのもわざとらしいし、かといって「まったく駄目だ。なにもかも絶望的だ」と答えても相手を心配させてしまう。この〝On fait aller〟という返答には、たとえ現状はうまくいっていないとしても「きっとどうにかなるさ」というかすかな希望が感じられる。それは望みのない空台詞ではなく、魔法の呪文のように響く。

私たちにできることは、結局祈ることでしかないのかもしれない。すべての大切な人たちが、どうか元気でありますように。明日も健やかに笑っていられますようにと。初夏の空はまだ青く、雲はかなた遠くから無限に湧き上がってくる。生命のエンジンがぐんぐん廻りだす。明日も明後日もまだ手つかずのまま太陽の向こうで待っているのだろう。

◆リヨン風信(十九)◆

解放

中川莉羅

三月十七日から続いたブロックダウン政策がついに解除される日が来た。五月十一日のことである。

ブロックダウン期間中、医療関係者や食料品店の従業員の方達を除き、多くのフランス国民が自宅での閉鎖的な生活を余儀なくされた。学生たちはオンラインで講義を受講し、会社員はテレワークを続けた。夜八時になると、街のヒーローを称える拍手の音がやわらかい雨のように窓の外で響いていた。

長期にわたる閉塞状態が続くと、あちこちに不調やほころびが出てくるようだ。家庭内での問題など、コロナウイルスの感染被害とはまた違う状況に苦しむ人々もいる。街に飛び出して忙しく活動している時には見えなかった問題に向き合わざるを得なくなるのだ。

私の通うリヨン・カトリック大学の開校は九月以降になると発表されたので、五月末に終了予定である今学期の授業は、結局すべてオンラインで行われることとなった。最終試験はかなり簡略化され、メールで送られてくる試験問題を、各生徒は自宅で取り組むこととなった。一番の難関

である小説の執筆もなんとか締め切りに間に合わせることが出来た。

こうした日々の隙間に、時折短い散歩に出た。長時間の自宅作業の後、明るい外の世界に出ると、見慣れた風景が映画のワンシーンのように見える。強い光の中、一瞬、時間の概念が吹っ飛びそうになる。内と外をつなぐ境界線さえ意識なくひょいとまたぎ、学校だ仕事だと、あわただしく駆け回っていた日々が嘘のようだ。アパートを出る際、暗い廊下でエレベーターを待つ間、隣室からテレビの音が聞こえてくる。閉じられた扉の向こうには私と同じく生活している人々がいると思うと少しほっとしたものだった。

人間の視界はルーティンワークによってだんだん狭まってくるものらしい。どのような状況に置かれても、人は目の前の現実を自分が把握できるサイズに圧縮加工し始める。よく行くスーパーマーケットの陳列棚のどこに何が置いてあるのか。どの野菜がどのくらいの値段なのか。どの道を通れば最短距離で家に帰れるのか。旅行者の立場ではなく、生活者としての目線になり、いちいち新鮮な感動など覚えていられなくなる。目は色々なものを見落とす。例えば、公園に向かう通りに沿って並んでいるオスマン朝スタイルの古い建物。一つ一つの窓にこらされた装飾。葡萄、ライオンの頭、女神の微笑み。そういったものを、このブロックダウン期間中ゆっくりと丁寧に観察する時間があるのは悪くなかった。

そう、この景色に慣れてきたからといって、私が異邦人であることに変わりはないのだ。一歩裏の通りに入れば、簡単に道に迷ってしまう。残念ながら帰国子女ではない私の頭の中のお喋りは常に日本語なので、突然外の世界に出ると、フランス語が飛び交っていることにびっくりする。そして思う。そうか、私はフランスにいるのだった。現実はまだ続いている。世界が終わったわけではない。

恐らく誰もがこうした地味な生活を続けながら、ブロックダウン解除の日をじりじりと待っていた。そしてついにその日が来た。とはいえ全面的な解除ではなく、一部の小学校や商店などが試験的に門戸を開く形となり、カフェやレストランなどの飲食店は六月二日以降に営業再開となる。

しばらくは冬のような曇り空と冷たい雨の日が続いていたので出かける気にならなかったのだが、ある晴れの週末、地元の友人たちと共に街に繰り出した。気が付けば冬も春も飛び越えて、いつの間にか初夏の風が吹いていた。天気の良い日曜日の午後、真夏のような日差し。私たちのお気に入りのカフェは当然ながらまだ閉店中なので、ローヌ河沿いの土手に座っておしゃべりした。皆、同じことを考えるらしく、河岸はたくさんの人々であふれていた。二か月ぶりの友人たちとの再開であったが、二人とも変わらず元気そうで安心した。この友人たちは音楽や絵画を愛するアマチュアのアーティストである。知能の高い人特有の批判精神と口の悪さは相変わらずだが、肚の底は純真な人たちである。真実を口にすることを避け、曖昧さを良しとする私のような人間にとって彼らとの交流はいい刺激になるのだ。

ローヌ河に架かる橋を渡る時、対岸にいつもグラフィティが見える。グラフィティとは、一九六〇年代ニューヨークに台頭したストリート・アートの一種であり、元々は壁にスプレーで描かれた落書きにしか過ぎなかったが、次第にアートとして発展していくことになる。一九八〇年代からフランスに流入され、しばしば現代社会に対する批判精神にあふれたメッセージが、街のあちらこちらで見受けられる。

そのイラストに描かれているのは、眼鏡をかけヘッドフォンをしたショートカットの若い女性。Tシャツにジーンズというラフな服装で、寝転んで雑誌を読んでいる。そこに「巨人たちの肩の上に新しい希望の波」のメッセージが添えられている。プティット・ポワソンヌ(Petite poissone：「小さな魚」の意)という、グルノーブル出身の女性アーティストによる作品である。本来、「魚」は男性名詞なので、「魚」の女性形を表す「ポワソンヌ」は文法的には正しくないのだが、敢えてこの表現を用いることによって、女性アーティストとしての立場を強調したのだろうと予想がつく。このメッセージの意味するところは実はよく分からないのだが、この作品を見かける度、なぜか励まされていた。学校や仕事からの帰り道、散歩中、ふわっと背中を押されるような気がしていたのだ。

件の友人のうちの一人は「ストリート・アート全般はあまり好きじゃないけれど、この作品はいいね」と言っていた。この作品はアメリカ人アーティストのキース・ヘリングへのオマージュであるらしい。

閉じ込められていた人々は押し出されるように街に出てゆく。見慣れていた風景が輝きだす。埃まみれの街は今日もまた活動を続ける。濁ったローヌ河には雨に流されて寄せ集められた流木が浮かんでいる。正義も悪も混沌とした流れの中に飲み込みながら、また日常が続くのだ。けれどその日々は、恐らくブロックダウン以前とは異なるものになるだろう。以前は当たり前だと思っていた日々が、いかに大切なものであったか。いつでも手に入ると思っていたものが、いかに貴重なものであるか。急いで通り過ぎていたいつもの景色が、いかに不思議な美しさに満ちているか。そうしたことを忘れずにまたあわただしい日常を送ることは出来るのだろうか。街はまだ動き始めたばかりである。

◆リヨン風信（十八）◆

ロックダウンとイースター

中川莉羅

気が付けば、春というより初夏に近い陽気なのだった。ロックダウンが正式に発表された三月十七日から始めの一週間は、誰もが恐怖と不満を胸に抱えながら恐る恐る過ごしていたように思う。しかし、やがて四月になり、窓の外に爽やかな風が吹き始めると、居ても立っても居られないとばかりに人々は街に出るようになった。スーパーマーケットや病院、薬局など生活に必要不可欠な公共の建物以外はすべて封鎖され、目的のない外出は自宅から一キロ以内、一時間以内に制限するようにとのお触れは出ているのだが（なお外出の際には理由と時間を明記した許可証の携帯が必須である）、さすがフランス人というのか、広場で日光浴を楽しむ人、テラスに出て庭仕事にいそしむ人、はたまた近所をジョギングする人などもいる。先日、近所のスーパーマーケットに買い物に行く道すがら、笑いさざめきながらそぞろ歩く女性二人と出くわした。

「La vie est belle!（人生は美しい！）」と明るく響く声で歌うように笑いながら女性たちは去って行った。いかなる状況にあっても生きることを愛するこの人々は、やはりフランス人なのだと思った。

このような状況の中、四月十日から十三日までの四日間はイースターが祝われた。

「復活祭」を意味するこのイベントは、十字架にかけられて亡くなったイエス・キリストが三日後に復活したことを祝う、キリスト教徒にとっての大事な祝祭日である。ロックダウンの状況ではそもそも食料品店の勤務者や医療関係者以外は自宅勤務中なので、祝日も何もないのではないかと思われるかもしれないが、そこはやはりキリスト教国家で、フランス人たちは頑固にイー

スターの祭日を貫くのである。具体的には何を行うかというと、メインイベントはやはり「エッグハント」と呼ばれる伝統であろう。お子さんのいるご家庭であれば、前日に庭に隠された卵やウサギの形をしたチョコレートを見つけるのが小さなキリスト教徒たちの仕事である。あるいは卵の殻にペインティングをするご家庭もある。大人たちはこの日のために特別に販売されているイースター用のチョコレートを贈り合う習慣がある。卵は生命の復活を、ウサギは繁殖力を象徴している。とはいえ、クリスマスと同様宗教的な意味合いは時代とともに薄れていき、今では欠かすことのできない家庭の伝統行事として受け継がれているようだ。

ロックダウンの期間中、人々はどのように過ごしているのであろうか。インターネットサイトではここぞとばかりに映画や音楽の無料配信が行われ、美術館やオペラ観劇なども「自宅に居ながらにして楽しめますよ」と、門戸を惜しげもなくウェブ上で公衆に開放している。ソーシャルネットワーキングではいかにしてこのロックダウン期間を充実させるかといった議論がよく持ちあがり、「特選読書ナンバー10」だの、「料理や庭仕事、ヨガを楽しもう」だのといったタイトルが画面に踊っている。直接会えない友人達ともアペリティフ（夕方の食前酒）を楽しもうというわけで、スカイプ通話をしながらベランダで長くなった晩春の夕べを味わう人々もいる。一方で、長期にわたる閉塞状態により持ち上がった問題と向き合わざるを得ない人々もいる。自宅での仕事で週末も休みなく働かざるを得なくなったサラリーマン、家事や子育てに一日中追われ息をつく暇もない主婦、家庭内暴力に苦しむ女性（三〇％増加）など、コロナウィルスの感染被害とはまた違う問題が浮上しているようだ。そうした被害が一刻も早く収まるよう願うほかない。

私はと言えば、幸いなことに大学の授業や仕事はインターネットを通して行われ、宿題も毎日どっさり出るため、案外充実しているように思う。しかしそうした雑事が何と心を救うことか。もし私達が何をする必要もなく、ただ無償の「自由」を与えられたとしたら、それはもしかしたら味気ない、いやもっといえば恐ろしいほどの空白の時間なのかもしれない。人間は意味を求める動物である。魂を圧迫する心の闇でさえ、ただ無駄に生きているというぼんやりした焦燥感よりはましなのだろうか。

毎晩二十時頃になると、窓の外で人々の叫ぶ声と音楽が聞こえる。外出禁止のはずなのに、外に出て鬱憤晴らしをしている人々でもいるのか、あるいはフランス政府に対する抗議運動だろうかと、最初は訝しんだ。しかし、実はそれは医療関係者たちを支援するリヨン市民の声援と拍手であることが後に判明した。いつからかパリを中心に広まったこの習慣は、今ではフランス全土に広まっているようだ。私は自分の猜疑心を少し恥ずかしく思った。世界は思うよりも温かく、慈愛に満ちたものなのかもしれない。春の雨のような拍手の音を遠くに聞きながら、未だ私は部屋に閉じこもっている。いつの日か、ここから出られる日が来るのだろうか。ただ学校に行ったりお金を稼いだりするためだけではなく、自由と歓びに溢れて、さあここで生きようと部屋を飛び出してゆける日がくるのだろうか。私達が答えを手にするのはもう少し先のようである。

◆リヨン風信（十七）◆

騒動と情熱

中川莉羅

二〇二〇年の春はコロナウイルスの話題で持ちきりである。中国で発生したと言われる新型ウイルスに世界中が戦々恐々としているが、ヨーロッパでも遅まきながら本格的な対策が始まった。三月十三日フランス大統領のエマニュエル・マクロンは、ウイルス感染の拡大を防ぐため翌週から全土で学校を休校にする旨を発表した。レストラン、カフェ、映画館なども一時的に閉鎖され、十七日正午以降、許可のない外出は禁止となる。三月十九日時点で感染者の最も多い国はもちろん中国で、その数は八〇八一三名に上り、死者は三一七六名。続いてイタリア、イラン、韓国と続き、フランスは五番目に感染者数の多い国である。一〇九九五名が感染、三七二名が死亡し、感染の拡大に歯止めがかかっていない。日本での感染者数は九二四名、死者は三九名で、十番目に感染被害の多い国となっている。一刻も早く被害が収まることを願うほかない。

「コロナウイルス」の名はもはや日常の挨拶と言っていいほど話題に上る。スーパーマーケットで食料品やトイレットペーパーを必死の形相で買い込む人々がいる一方、最後の日曜日の午後の陽射しを満喫しに、公園でピクニックを楽しむ人々もいる。サラリーマンたちは自宅待機。インターネットを通じて仕事することを余儀なくされ、学生達は突然の春休みに喜んでいる。旅行やイベントのキャンセルはもちろんのこと、スーパーマーケットに買い物に行くのにさえ許可証が必要となる。ほんの二、三週間前までコロナウイルスの脅威にびくともしなかったリヨン市民たちだが、さすがに街中の雰囲気が緊張してきたようだ。

とにかくそうしたわけで、私達の通うリヨン・カトリック大学でも突然の休校が宣言された。予定されていた中間テストは宙ぶらりんとなり、先生方は終わりの見えなくなった授業のプログラムを抱えて途方に暮れているようだ。私達外国人留学生は、呑気に明るい笑い声を上げ、春の陽射しを一足早く浴びられる開放感にうきうきとした足どりで帰って行った。

こうした状況の中、三月十五日にフランス全土で第一次市町村議員選挙が行われた。コロナウイルスの影響を受けて一時期は投票が危ぶまれ、棄権者数は過去最大の五五・二五％に上ったものの、第一次選挙は無事に決行された。二十二日に予定されていた第二次選挙は急遽六月に延期となった。しかしコロナウイルスの影に隠れて選挙の話題は忘れ去られているようだ。こうした事態になることを一体だれが予測しえただろう。突然の政府の対策に対し、市民の私生活を取り締まるなど独裁政治の始まりだとか、たった十五日間の外出禁止でウイルス騒動が収束するはずがないとの声も上がっている。また、市民の暴動を恐れる向きもある。いずれにせよ、状況は次第に厳しくなりつつあるようだ。

ある日、最後の外出可能日を利用して昔馴染みの友人が仕事帰りに遊びに来てくれた。リュックサックにたくさんの野菜や果物をつめて。「スーパーマーケットにすらおちおち買い物に行けない

からね。遠慮せず食べて」とのこと。真っ赤なみずみずしいトマトに卵、ミント、オレンジ、バナナ、ころころと可愛らしい林檎などが次々と現れ、みるみるうちに冷蔵庫がいっぱいになった。有難いことである。友人の出現により、無音の部屋がとたんに活気づく。たった一人の人間がもたらす力が太陽のように感じられる。

　このような状況が誰にとっても奇妙なものに感じられるのは当然のことだと思う。一歩外に出れば、ウイルスの脅威にいつ何時さらされるか分からないと、暗い顔をしてせかせかと歩く人々に出くわす。けれど家の中に留まることを余儀なくされると、インターネットに音楽にコーヒーにお菓子にと、私達を甘やかす要素はうんとある。仮病で学校を休んだ子どものように、引き延ばされた時間を持て余している人が大半のようだ。件の友人も「全然・仕事をする気が・おきない！」と節をつけて歌いながらパソコンでの仕事に取り組んでいた。

　アマチュアのイラストレーターであり小説の執筆もこなすこの友人は、しかし自宅での作業には慣れているはずである。仕事場に行かない日は一日中パソコンに向き合っていると言ってもいい。

「だって情熱を持って取り組めることと、お金を稼ぐために機械的にこなす仕事は全く別のことだよ」と友人。「それに職場には上司や同僚がいるからね。和気藹々とした雰囲気とはいえ、さあ、仕事をこなすぞ！という雰囲気にあふれているんだ。自宅とは違う」

　家での勉強が苦手な私としては、自分だけが怠け者なのかと思っていたが、我が意を得たように思いほっとした。大学では一時間半で済む課題を終わらせるのに、二時間も三時間もかかる。たるみきった脳細胞を振り絞って一文字、一文字を埋めてゆくしかない。真っ白な光の照り付ける無人のアスファルトを歩むように、目的地は陽炎の向こうだ。それでも、ともするとさまよいがちな私の魂を外の世界につなぎとめてくれる何かがあるのは、有難いことなのかもしれない。

コロナウイルス騒動にも関わらず、友人のイラストは人気を博しているようだ。自身の創り上げた壮大な宇宙を語る時の彼は、水を得た魚のように生き生きしている。

「自然は神の創造だよ。美しいものはすでにそこにある。僕たちはただ、自然を模倣しているに過ぎない」と友人は言う。

「僕が世界を創造している時、それはフィクションやでっち上げなんかじゃない。それはそこに存在しているんだ。僕はただ、送られてくるメッセージを形にする作業をしているだけなんだ。その世界を創造しているのは僕であって僕じゃない。たまに誰が描いているんだろう？って思うんだ。あまりにも次から次にインスピレーションが湧いてくるから眠る暇なんてないくらいだよ」

長い間、描きたくても描けない、描くのが怖いと、己の中でささやく悪魔の声と闘ってきた彼を知っている私にとって、友人の活動復帰は非常に喜ばしいことである。

「まだまだすることがたくさんあるからね。こんなところで病気になるわけにはいかないよ」

そのようにきっぱりと言い切れるほど情熱を燃やせるものが、果たして私にはあるだろうか。大学の宿題として課された小説の執筆、試験、ビザの問題などフランスですべきことはまだまだたくさんあるのに、どれも中途のままのようだ。

窓からふと外を覗くと、うららかな春の陽射しが降り注ぐ通りには誰もおらず、街全体が眠っているかのようだ。外に出られないことがもどかしい。

もうすぐ冬時間が終わり、春分の日を境に夏時間が始まる。日本との時差は七時間に縮まることになる。昨年の今頃は友人達とスイスに旅行していたことを思うと、奇妙な感じがする。あの時、くだらない冗談に涙が出るほど笑い転げていた私達は幸せだっただろうか。眩い光を浴びて砂糖菓子のように輝くアルプスの雪景色を、しっかりとこの目に焼き付けただろうか。そうした数々の瞬間が写真のように鮮やかに甦る。その時に与えられたギフトはその時にしかないもので、二度と同じ瞬間はやってこない。けれど次の瞬間にはまた新たな希望が与えられる。また明日も生きていられることを誰もが願っている。どうか出来るだけ多くの人々が健やかでいられますように。宛名のない手紙のような祈りを空に託し、今日も眠りに就く。明日も窓の外で春の風が吹くだろう。

◆リヨン風信（十六）◆

傷跡

中川莉羅

二月のある日のこと。春になろうとする心を押し流すように、暗く激しい風が吹いた。雨の気配のする生ぬるい風。鷗たちは風の流れを量りかねるように、音符のようにばらばらとあちこちに散らばりながら飛んで行く。日曜日の昼を告げる鐘の音が湿った空気の中でぼんやりとくぐもって聞こえてくる。

三寒四温とはこのようなことを言うのだろうか。二月は不安定な気候が続く。日中の気温が十七度まで上がるかと思えば、翌朝はぐっと冷え込み零下一度になることもある。それでも地元の人に言わせると今年の二月は例年になく暖かいそうだ。雪の降らないリヨンの街はどこか物足りなく感じられるらしい。東京ではめったに雪が降らないと言うと、彼らは不思議そうな顔をする。きっとそれはサンタクロースのいないクリスマスのように感じられるのだろう。

大学では二学期目が始まったばかりである。前期で一緒のクラスだった友人達と再会できるのは心強い。一学期目は十人ばかりのおとなしい生徒達の集まるこじんまりしたクラスだったが、二学期目は生徒数が十七名。国籍は韓国、台湾、フィリピン、アメリカ、スウェーデン、ポーランド、コロンビア、メキシコ、カメルーン、イラン、インド、アフリカ共和国など非常にバラエティーに富んでいる。このように様々な国籍の人々と時を共にすることが出来るのは稀有な機会なのかもしれない。

リヨン・カトリック大学はかつて刑務所だったという。今ではキャンパスの名称となっている「サン・ポール」の名は暗く淀んだ危険な場所を地元の人々に喚起させるらしい。大学の位置する駅は人気のない寂しい場所で、夜には誰も通りたがらなかったそうだ。二〇〇九年に監獄としての機能が停止となり、徒刑囚人達の移送が行われ、翌年二〇一〇年にリヨン・カトリック大学として改装された。

先日、リヨン出身の友人が大学まで遊びに来てくれたのだが、すっかり新しく生まれ変わったキャンパスの様子に驚いていた。ホールにこだまする学生達の明るい笑い声、高くそびえる鉄筋コンクリートの壁、青空をくっきりと映し出す丸窓、カフェテリア、清潔な教室。

「こんなに素敵な大学だとは知らなかった。ここで勉強出来て、君はラッキーだね」と友人。私達のような外国人学生はかつてここがどのような様子だったか、むろん知る由もない。くすんだ壁に書かれた乱暴な言葉、じめじめした地下道、囚人たちが絶望的な思いで見上げたであろう鉄格子など、かつての牢獄を思わせるものはもう何も残っていない。

サン・ポール監獄の元囚人に焦点を当てたショート・ドキュメンタリーを授業の一環で観たことがある。契機を務め終えて数十年の月日が経ち、今では平和な生活を送っているその男性がかつての刑務所を訪れた時、彼の顔に現れたのは驚愕とも脱落感ともつかないなんとも不思議な表情だった。古い傷跡を探しながら彼は一つ一つの教室をゆっくりと回ってゆく。まるで上手に再現された宇宙空間に初めて足を踏み入れる少年のように。あるいは白紙の記憶を取り戻そうとする哀れな男のように。大講堂を訪れたその男性は、授業を終えた数人の学生達とすれ違う。彼らは風でもまとっているかのように颯爽と去る。自由の重みと価値を知らぬ人々を、その輝きをあまりにも自然に身に着けている人々を、男性はぼんやりと見送る。

「若い時分に馬鹿なことをやらかしてしまったので、大学に通う機会がなかった」と男性は言う。

「刑期中、毎月一度だけ外出を許されていたのだが、私はいつも大学に行っていたよ。自分と同じ年頃の　学生達が、何を感じどんなふうに過ごすのか興味があったものでね」。今、元徒刑囚の男性には四人の子供達がおり、彼らは全員大学での学業を終え、それぞれ職に就いている。刑務所としての面影のまったく残らない、清潔で無機質な大学を見てどう思うか、とのインタビュアーの質問に、男性は戸惑いながら答える。

「ほんの少しくらいなら、過去の形跡を残しておいてもよかったんじゃないかな。これじゃあ、あまりにも…。いや、どうだろう。やはりこれでいいのかもしれない。分からない…」

この男性の回答に私は驚いた。「苦々しい記憶の跡など消し去るべきだ、あんな体験はもうたくさんだ、思い出したくもない」と答えてもよさそうなものなのに。

人間は過去の苦しみさえも愛おしむ生き物だ。私達は石に傷を付けて形を与えられる彫刻作品のようなものだ。つるりとした大理石のままでいられたらどんなにいいだろうと願ったことのない人間はいないだろう。しかし同時に、傷をなくすということはアイデンティティをなくすことでもあるのだ。

記憶はまた、個人のものであると同時に集団意識に基づくものでもある。語り継がれるべき記憶というものもある。先述の友人と共にリヨン美術館を訪れた際、中庭に設置されたギリシャ彫刻の美しさに目を奪われた。完璧な肉体美、実際の人間以上に生き生きとした表情、足の指先や服の襞に至るまで創りこまれた作品。遠いはるか昔のギリシャの神々が、白い息を吐いて今にも動き出しそうだ。

「子どもの頃もこの中庭を訪れたはずなのに、これらの像がまったく記憶にないんだ」と友人は言う。

「たぶん、そこらへんを駆け回っていたんだろうね。この国には芸術作品がふんだんにあふれていて、幼い頃はそれが当たり前だと思っていた。空気のように自然なものだったんだ。けれど、大人になった今なら分かる。先人達の残したこれらの作品は決してありふれたものではないし、人類が残した偉大な業績だと思う」。

そして友人はそれらのギリシャ彫刻の像を、一体ずつ丹念にカメラで捉えていった。過去に先人の残した足跡が、今日の記憶として残る。やがてその「今日」もまた「明日」になり、「一年後」になり、いつしか十年後に再び新たな記憶となって甦るのかもしれない。

仕事を終えて家路に着く時、銀色の翼をひるがえし、夜のローヌ河を渡る鷗の群れに出くわす。一羽一羽はそれぞれの記憶を持っているのだろうか。それともＤＮＡに刻まれた「本能」という名の地図に従ってただひたすら飛ぶのみなのか。本能に従って生きることの出来ない私達人間は、癒えない傷を庇いながら破れかぶれで家路に着く。明日もまた新しい記憶を創ってゆくのだろう。